

第四章 古墳時代

第一節 古墳時代総説

一 古墳時代とは

古墳が造ら 古墳とは土を高く盛った古代の墳墓である。おられた時代 よそ三世紀後半から七世紀代にかけて、北は岩手県南部から南は鹿児島県にいたるほぼ日本中で、前方後円墳(方)墳・円(方)墳などの大小の古墳が造られた時代があった。このころを古墳時代と呼んでいる。列島最大の前方後円墳である大阪府大仙古墳(仁徳天皇陵)は墳長四八六メートル、周溝を含めると七〇〇メートルを優に超える規模をもつ。全国で造られた古墳の総数については一〇万基とも二〇万基ともいわれるが、確定は非常に難しい。その中、前方後円墳は約四五〇〇基あり、九州では五六〇基ほどが確認されている(表2-9、近藤義郎編『前方後円墳集成』一九九一〜九四)。この数も確定したものではなく、今後も増加することであろう。弥生時代の段階では、たとえば成人を甕棺に埋納するといった風習が福岡市から久留米市・佐賀県東部付近で継続して一般的に行われたが、一

時的に採用した嘉穂盆地や日田盆地などを含めても北部九州のすべてをカバーしたものでなかったことに比べれば、ほぼ律令国家の版図に重なる本州・四国と九州の大部分に広まった古墳文化の背後には相当に大きな社会変化が起きたことが想像される。そして、この時代は、それまで以上に中国大陸や朝鮮半島との間で戦闘行為も含む頻繁な交流が繰り返され、新しい思想・文化や技術が人々とともに渡来した変革の時代でもある。朝鮮半島での高句麗・新羅・百濟等の国家間の緊張関係を身近に見、中国古代王朝の盛衰に触れた当時の支配者層に国家意識が醸成され、大王に権力が集中する安定した統治機構の確立を目指し、やがては天皇を頂点とする律令国家へ転換していった。

勝山町が位置する豊前地域も、長い歴史の中では時として舞台上に立つこともあった。この地域に生活していた私たちの祖先は社会の変化を肌身で感じていたことであろう。ここでは、「日本国」の成立前史と、郷土の関わりについて紹介する。

表2-9 九州の前方後円墳

国名	基数 (前方後方墳)
筑前	142(5)
筑後	44
肥前	60(1)
肥後	63
壱岐	12
対馬	4(1)
豊前	38
豊後	35
日向	150
大隅	12
薩摩	1

(柳沢一男他『前方後円墳集成』1992より)

『古事記』と『古事記』は和銅五年（七一二）、『日本書紀』『日本書紀』紀は養老四年（七二〇）に成立した我が国の歴史書である。いずれも書き出しはヒトが誕生する以前からであり、前者は推古天皇、後者は持統天皇までの出来事などを載せる。つまり古墳時代以前の我が国の歴史は『記紀』に記載された時代に重なることになる。したがって、『記紀』に記された内容がすべて事実であれば、考古学は必要ないという意見があるかもしれない。しかし、『記紀』編纂時から遠く遡った時代の出来事の記述にどれほどの信頼性があるだろうか。また、往々にして時の為政者は自身の都合のよいように歴史を創る。更に、二十一世紀の現在に生活する我々一般庶民は、マスコミに取り上げられることもなく墓石に名を残すだけとなるが、我々の生活した家の跡、そして近年では少なくなったが家の周りのゴミ穴はまぎれもなく私たちが生活した証しとして残る。考古学はこのような一般庶民を含めたすべての人々の家の跡や墓・ゴミ穴などを発掘して能力の限り当時の生活を復元する作業である。生活者の氏名が判明することはほとんどないが、その時代、まぎれもなくそこに生活した人々の姿を蘇らせることが可能なのである。

『記紀』が初代とする神武天皇は九州日向（現宮崎県）を出立して大和で即位したが、それは推古九年（六〇一）から一二六〇年遡った辛酉年とされている。これは辛酉の年に革命が、

二一回目の辛酉には大革命が起きるとい中国の讖緯説（しんいせつ）にならって創作されたもので、そのために神武天皇が一三七歳（記）、一二七歳（紀）まで生存したとするなど歴代天皇の年齢だけみても非現実的な記述がみられる。また、豊富な事績が記された人物がいる反面、^{すいせい}綏靖（第二代）〜開化（第九代）天皇のように父母・妻子の氏名や宮の場所、そして没年を記しただけの内容空疎な記述の天皇があり、その叙述は一貫していない。『記紀』には創作された個所が多いと考えられるのである。

しかし、中国や朝鮮半島に残るわずかな同時代文字史料や、更に乏しい国内独自の文字史料に比べて『記紀』は遥かに豊かな内容をもつ。その記載内容を検証し、考古学や民俗学とつきあわせることによつて、古墳時代は弥生時代以前の歴史に比べて内容豊富となつていることも事実である。

ここで取り扱う古墳のいくつかは、皇室祖先の墳墓として現在も宮内庁が管理する。『記紀』や平安時代の『延喜式』の記載に基づいて明治初めに定められたもので、現在の考古学的知見から異論が出されているものも少なくない。近年では山陵修繕に伴う発掘調査がなされて内容が公開されているが、なお、畿内の大規模古墳の多くが宮内庁管理の下にあって古墳時代研究の大きな障害要因となつている。学史的にも、現在においても山陵は古墳時代の社会を考えるうえで大きな影響力をもつていたのである。

古墳時代の 四〇〇年近く続いた古墳時代にあつて、社会は**時期区分** 大きく変化し、それは古墳のあり方にも色濃く反映している。近年では『前方後円墳集成』による一〇期区分が使用されることが多くなっているが、ここではもつとも普及している三時期区分をとりた。ただ、年代比定は従来のものとやや異なっている（和田晴吾「古墳文化論」『東アジアにおける国家の形成』日本史講座第一巻、二〇〇四）。

前期 古墳の被葬者が司祭的な色彩を濃く残し、古墳で祭祀を行うことが非常に重要視された時期で、三世紀後半から四世紀中葉を指し、大王（天皇号が成立する七世紀末ごろ以前の呼称）墳は奈良盆地東南部に集中する。古墳を中心とする祭祀を共有することで、各地の首長（豪族）はヤマト政権との間で、そして首長間においても仮想的な同祖同族関係を維持・再確認し、そのことよつて地域での首長権を保証されたのである。古墳発生のところは中国製銅鏡（舶載鏡）が重要な威信財とされ、玉類や鉄製武器・武具や農工具なども必ずといつてよいほど副葬された。後半には国産鏡（仿製鏡）や碧玉製腕飾類（図2-109）といった国産の呪術的遺物に変化する。

中期 四世紀後葉には奈良県石上神宮の「泰和四年（三六九）」銘の七支刀や中国集安にある「好開土王（好太王）碑」に見られるように、ヤマト政権は朝鮮半島へ軍事的進出を
実行するまでになる。朝鮮半島の動乱は日本列島にも大きく影

響し、半島の技術者や知識人の渡来、そして彼らに由来する種々の技術や文化を反映した遺物が現れ、普及する。このころから副葬品には呪術的遺物に代わつて武器・武具が一層顕著となり、軍事的性格が強い王権へと変容していく過程が窺える。国際情勢や王権の変質に伴い、大王墳は奈良盆地北部を経て河内・和泉へ移動し、巨大化する。しかし、『記紀』による限り大王の居住する宮の多くは大和に営まれた。

後期 五世紀後葉以降を指す。それまで各地域で大型前方後円墳を造営していた勢力が没落し、新たな勢力による造墓が始まることから、旧来の地方首長の支配権を解体・再編して直接的に民衆を支配する、より中央集権的国家へ動き始めた
と解釈される。筑紫君磐井の乱、吉備の反乱などの伝承はヤマト王権の地方支配の完成を示すものである。文献史学からの視点でも、この時期の雄略朝を国造制・部民制や屯倉制等が成立した地方支配の大きな画期と位置づけられている。

そして、前方後円墳は六世紀末〜七世紀初めにはもはや造られなくなり、国家体制は律令国家へ向けて更に大きく変容していく。これ以降を特に終末期と呼ぶことが一般的となつている。ちょうど聖徳太子の活躍した時代を画期として、仏教文化が影響力を増大し、列島各地へ広まるとともに古墳文化も完全に終焉を迎える。